

諫早市総合教育会議議事録

平成28年度 第1回

★ 教育長

定刻になりましたので、これより平成28年度の第1回目でございますが、諫早市総合教育会議を開会いたします。

まず始めに、宮本市長からご挨拶をお願いしたいと思います。

● 市長

今年度第1回目ですけれども、諫早市総合教育会議を開催いたしましたところ、教育委員の皆様方にはお忙しいところ、ご出席を賜りまして誠にありがとうございます。

総合教育会議でございますけれども、平成27年の4月に法律の改正がございまして、その改正により総合教育会議の設置及び教育大綱を策定することが義務付けられております。

本市の基本的な考え方を決定するといえますか、会議の意見を取り入れまして大綱を策定する、大綱ということは教育の基本的な姿勢を明らかにすることだろうというふうに思っております。

今回は、テーマといたしまして「英語教育」、そして「子どもの体力」、それから「家庭教育」家庭と地域の連携ということでございます。これは1時間ほど話をしてということにはなかなかならないと思うんですけれども、そういう問題を教育委員の皆様方と、私たちと共有をするということが大事なことかなというふうに思っております。

教育環境の整備につきましては、耐震化も昨年末に終わりました、耐震化も100パーセントということですが、吊天井の部分があるということで引き続き、そういうものの改修をしながら子どもたちの教育環境の整備、それから危険防止といえますか、安全・安心な学校教育ということで取り組んでまいりたいというふうに思っておりますし、最近、特別支援学級で教育を受ける子どもが多くなってきておまして、これに対応する支援措置も考えているところでございます。いずれにいたしましても、新年度が始まってということになると思います。

諫早市の耐震化の計画というのは、耐震化だけではなく老朽化の改修も併せて行ってきたということで、耐震化の他に費用も多分3倍くらいは投入したかなと思っております。効率的な改修を行ってきており、これで終わりになるとは思っておりませんが、とりあえずの部分については目処がついてきたというような状況でございます。

是非、今日は忌憚のないご意見を賜りまして、そして色々な意味で、私も教

育に詳しいわけではありませんので、是非ご意見を賜りながら自分の考え方をまとめていくことにしたいなというふうに思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

★ 教育長

ありがとうございました。これより議事に入りたいと思います。

今回の議事といたしましては、先ほど市長のほうからもございましたように、意見交換ということで3つのテーマ、「英語教育について」、「子どもの体力について」、「家庭教育について」を予定いたしております。これは時間の許す限りどこまでいくかというようなことになりますが、まず初めに1つ目のテーマということで、「英語教育について」協議をしていきたいと思ひます。

事務局から資料等の説明がございましたらお願いいたします。

□ 学校教育課長

1点目のテーマであります「英語教育について」ご説明いたします。本日の総合教育会議意見交換資料の冊子でございます。お手元でございますでしょうか。

1ページをご覧ください。文部科学省においては2020年の東京オリンピック等を見据え、2014年度から逐次グローバル化に対応した英語教育改革を実施しております。1の項目にございますように、小学校においては中学年からの外国語活動の実施と高学年の英語教育の教科化を、また中学校においてはクラスルームイングリッシュ（授業を英語で行うこと）を改革の目玉にしております。

このことにより小・中・高一貫した英語によるコミュニケーション能力の育成、そして日本人としてのアイデンティティーに関する教育の充実を目指すものでございます。

資料の4、5ページをご覧ください。このことを受けまして、諫早市におきましては、平成27年度に「諫早市英語教育推進プラン」を策定し、特に小・中連携による授業改善や教職員の英語力及び授業力の向上を図っているところでございます。

今年度の具体的な取り組みについてご説明いたします。資料は3ページにお戻りください。今年度は長崎県教委の「ながさキッズ イングリッシュ チャレンジ事業」とタイアップいたしまして、大きく4つの授業を展開いたしました。

1点目は中1の生徒を対象にしたイングリッシュキャンプ事業でございます。

2学期に市内全中学校の1年生の生徒が、佐世保のハウステンボスでのキャンプを経験しております。また、資料の9ページからに載せておりますが、今年度は諫早市独自でも、ウエスレヤン大学の協力を得てイングリッシュキャンプを実施いたしました。詳しくはその資料を後ほどご覧ください。

再度、資料の3ページにお戻りください。中学生の英語力を高める取り組みといたしましては、長崎県に準じまして校内でのスペリングコンテスト、また、先日の1月6日には、諫早市中学生英語暗唱大会を開催いたしました。2月には本市の代表の長田中の 諸岡 胡桃 さんが、大村での県大会に出場いたします。この他、教職員の英語指導力向上を目指して地区別研修会を実施するとともに、大草小学校を研修協力校とし活水大学と連携し、研修実践の発信や先進的な授業の公開を行っているところでございます。

最後に、資料の13ページをご覧ください。これは中学2年を対象とした長崎県学力調査、英語の過年度の結果を載せております。諫早市の子どもたちの成績は、今年度やや県平均を下回ったものの、ほぼ県平均のレベルで推移しているところが子どもたちの英語力の現状でございます。簡単ではございますが、以上で英語教育についての説明を終わります。

★ 教育長

ありがとうございました。ただ今、事務局から説明があったところでございます。グローバル化の中での英語教育の充実、推進という部分について、国の推進方向が示されているところでございますが、諫早市の英語教育につきまして、皆様方からのご質問、ご意見などをお聞かせいただければと思っております。どうぞご自由にご発言をお願いしたいというふうに思います。

どうでしょうか、宮本委員から。

☆ 宮本委員

よく私はグローバル化というのは何だ、英語を話せばそれでグローバル化なのか、決してそういう話ではない。英語で何を話すか、相手に何を伝えるのか、それをどう考えていくかということで、そこのところを見ると中学校の英語の教科書には、一切そういうふうな判断とか思考、それから協力とかという部分はでてこないんですよ。ところが国語の教科書にはきちんとでてきます。だから、国語ではしっかり言語というのはこういうものなんですよ、というのが強調してあるのに、それが英語ではあまり強調されていない。でも、この「教育実施計画」によると必ず出てくるんですね。だから、そこのところを子どもた

ちにもきっちり分かってもらってすれば良いものができていくし、ついこの間、中学生のリーダー研修というものに私も参加させていただきましたけれども、話をした後に質問ということでサッと手が挙がって、時間がないので今日はこれで終わります、というぐらいに活発な質問がでてくる。

ということで、国語教育をしっかりしてもらおうと、グローバル化につながる英語教育もでてくるのではないかと思いますので、英語、英語ばかりで力を入れるのではなくて、国語のほうもしっかりとやっていただければと思います。

今は、先日の子どもを見る限り、良い方向に進んでいってるのではないかと思います。

★ 教育長

他にご意見はございませんか。今おっしゃられたようにコミュニケーション能力ですね、まずそこら辺は大事だろうというふうに思います。国語力があって初めてコミュニケーション、自分の意思をどう伝えるかというようなこと、英語はその手段、方法の一つですね。

どうぞ大石委員。

☆ 大石委員

だいたい私たちの時というのは、中学1年から英語をやらせていただいたわけですが、前半はですね、非常に簡単でみんな点数が良くていけると思っていたんですけども、ある一定時期からですね、ちょっと気をそらすとついていけなくなる。僕もその中の一人だったわけですけども、そういったことを考えると、小学校、中学校、特に中学校はもう高校受験というのが出てくるわけですが、英語に親しむ、そして慣れさせる、外国語という壁を取り除いてやるという部分でいけば、点数云々よりも英語で会話をして楽しむというところ、今回の小学生低学年からそれに入っていくというのは非常に良いのかなと。

皆さん多分聞かれたことあると思いますけれど、日本人ほど英語の時間に費やして、日本人ほど英語が下手な民族はいないとよく言われ、よくネットなんかでも書かれてることなんですけど、これが一つ突破口になるのかなと。

そこで、諫早独自の小学校の英語の取り組み方というものがあれば、教えていただきたいなど。

★ 教育長

市独自の取り組みという部分ではありますでしょうか。

□ 学校教育課長

文科省、それから県教委から出される指針に沿ってやっているところではございますが、宮本委員もおっしゃってくださっていましたが、英語力の向上というのは、英語の語学力だけではなくて、自ら相手と交わろうとするコミュニケーション能力、それから自分の国の文化、自分の諫早の文化を発信でき大事にするような気持ち、失敗しても使ってみようと思うようなチャレンジ精神、そういうものも含まれた英語教育の充実ではないかなというふうに思っております。ですので、特に体験活動というのが大事になってきます。

そして、本市におきましては伊木力小学校などを中心にオレンジデーなどを設定し、多くの外国人、それから対外的に人を招いて地元の伊木力の良さを発信するというような英語教育をしておりますので、そういうところが特色ある取り組みかと思っております。以上でございます。

★ 教育長

ありがとうございました。体験等を取り入れて英語に慣れるというか、そういうことが大事かというふうに思います。

ご意見ございませんでしょうか、秀島委員。

☆ 秀島委員

先ほどから宮本委員さんがおっしゃっていたように、やっぱり英語教育ということに特化した、英語だけを取り上げるだけではなくて、国語教育というベースがあって、また、日本人としてのアイデンティティーに関する教育の充実ということも謳ってありますけれども、そういった背景とか、自分たちが住み、生まれ育った場所の歴史とか文化とかいうものをきちんと理解した上で、コミュニケーションツールとして英語を学ぶというのはとても大事なことだなと思います。

伊木力小学校には私も何度か参加させていただいたんですけど、低学年からとっても生き活きとして、自然な形で英語活動をしている姿が見えて、ああいった形で、特別取り出して英語という、授業時間としての中での英語学習ではなくて、様々な場面での触れ合いということがあって、身に付いていくものだろうなというのは実際にとても感じる場所でもありますし、あとは中学校の英語の先生、小・中の連携ということでも効果的な取り入れ方をされています。あそこは、大草小学校があり、伊木力小学校があつて琴海中学校があるんですけども、琴海中学校の先生との交流もあつてますので、そのあたりでもまさ

にモデルになるような形で、今進められているのは市内の他の小中学校でも同じような形で進めていけば、なお良い方向で進めていけるのではないかなと感じるところです。

★ 教育長

そうですね、本当に伊木力小学校は低学年からオレンジデーなども含めて、英語に、英語といいますか外国語活動ですね、それに対応しているといいますか、勉強されてこられたという実績もございますので、そういう意味では先進的な部分でモデルになるのではないかなというふうに思っております。

緒方委員長、何か就学前からの取り組みとか、そういう部分はどうかでしょうか。

☆ 緒方委員長

保育園を運営しているんですけれども、よく業者さんから英語をカリキュラムに入れたらどうでしょうか、というセールスの電話がかかってきます。まず日本語の教育といいますか、自分の思いとかそういうものをきちんと伝えるということを大事にしたい、ということでお断りはしているんですけれども、今回、アメリカの大統領の選挙がありました。その中で、どれほど自己主張するのかということがあり、その一つの言語として英語があるんだろうなと思います。

私たちが身につけている謙虚さであるとか、奥ゆかしさとかであるとか、そういう日本人が持っている美德といわれるものと相反するような文化体系が、英語圏の中にどこか含まれているような気がしています。

私たちは、保育園で子どもたちを小学校に就学させるに当たって、給食は20分で食べさせるようにしてくださいですとか、15分は静かに座らせるような準備をしてもらいたいという、学校への引き継ぎの中で話があるんですけれども、一斉授業をするような授業体系の中で、自由に討論したり、自己主張をしたりするような英語を取り入れた授業というのは、わりとそういう印象があるので、私たちが慣れ親しんでいる講義形式の授業形態と、もっと自己主張をするような自由討論というか、そういうものになりやすいような英語の授業と、バランスというか組み合わせ方が、英語教育にはこれから必要になってくるのではないかなというふうに思っています。

保育園では、わりと自由にどの時にでも話ができるような環境にあるので、そういう意味では幼児の段階から英語に親しんでいる方が良いのかなというふ

うなことも感じています。

★ 教育長

ありがとうございました。幼児教育と申しますか、日本の授業形態が自己主張をしないと申しますか、日本の授業では足りない部分というのが、そういう部分ということで、今までは一方通行の授業だったんですけど、討論形式とかアクティブラーニングというのが今からの授業の形ということで言われているところがございます。

そういう意味では、とにかく外国は自分の意見を言わないと、存在感自体が肯定されないというようなことになってしまうという文化ですから、日本の奥ゆかしい文化と申しますか、そういう文化とは全然違いますので、英語を通じて逆に文化を自己主張する、そういう部分を今後学ぶことも必要ではないかというような感じがいたしております。

宮本市長の方から何かございませんでしょうか。

● 市長

大石委員と一緒に英語を何年間も習ったのに、何もできないという世代に育ってますので、そういう意味では英語を使う機会がほとんどない。多分、心配しているのは、先生たちがそういう世代に育っているのではないかなと思ってます。だから、2020年のオリンピックに向けてというよりも、もう遅きに失したという感じが私はしています。

早くに、グローバル化というのは常に言われてきたわけですから、語学ができれば良いというものではないですから、ただ、その環境が整備されてこなかったということが非常に問題だなというような気がしております。そういう意味では遅きに失したかなというふうに思いますし、急に英語力を向上させましょうといっても、そう急にはいかないかなと。それは指導者、先生たちの問題もあると思いますし、先生たちも学校で私たち以上に英語を習ってきたんでしょけれども、喋ってない時間が何十年もありますと、ほとんど忘れてしまっているはずなんです。

自分の頭の中で考えて、日本語で考えて、英語で表現するということがあるんですが、会話は本来そういうものではないはずなんですけれど、そういった意味では一定の時間をかけながら、これからに向かってどうやって英語教育を充実していくかということを考えるべきではないかなという気がします。

ですから、この2020年が終わると終わりなのかという話で、そうではな

くて、日本がおかれている世界の中での日本というのを見た場合に、やはりこれまでも英語教育に問題があったはずなのに、2020年をとすることでそういうことになっていくのは、物足りない、というのはちょっと適切ではないかもしれませんが、遅きに失したという気がしますし、世代はずっと繋がっていくので、そういう意味ではやっぱり、先ほど秀島委員もおっしゃいましたが語学は文化ですから、文化が分からないと言葉だけ分かってもしようもない。そういう文化の違いが分かるレベルになるためには、時間がかかると私は思っています。

★ 教育長

なかなか、英語に取り組みという部分では、アジアで言うと、日本はようやく平成23年からなんですよね。それも小学5年からなんですけれど。中国は平成13年からで、それも小学校3年。韓国は平成9年からで、小学校3年からなんですよね。台湾も平成13年からで、小学校3年からというようなことで、アジアの各国はかなり早くからやられているんですね。

● 市長

ちょっと違うと思うんですけど、日本は島国で移民をほとんど受け入れてないですよ。そういう国際的な環境というのものも、フィリピンとか同じような島国、インドネシアとかありますけれども、同じような島国でも日本ほど単一民族国家の色彩が強い国民というのはあまりないと思うんですね。そういった中で、やはりこれまで遅きに失したというぐらいに、あまり力を入れてこなかったということが、しかも、書く・読むということを中心にやってきて、会話をするのにあまり重点を置いてこなかったのは、英語教育をしていないわけではなくて、読み・書きだけ、テストは全部そうでしたから、私たちの時代は。今はヒアリングがあるのかどうか知りませんが、そういうことに重点を置いてこなかったのは、そういう背景もあるのかなという気はしてるんですけど。

★ 教育長

国が外国に侵略されて、公用語が昔は外国語であったとか、そういう部分の文化の違いもあるかもしれませんが、市長が言われるように、今までの日本の英語というのはテスト向けの英語であって、読むと書くだけでですね、話す、聞くというのがほとんど伸びてなかったというのは事実ですね。だから、そういう意味では今後は、体験を含めたところでの英語の取り組みというようなこ

と、だから、今度小学校3年から始まりますので、とにかく英語に小さい時から慣れ親しむというのは大事な事かなと思っています。

● 市長

小さい頃からずっと親しまないといけないですもんね。大学の同期で大使館員の息子だったんですけども、中学まで外国暮らしでした。その時は英語がペラペラだったんですよ。ところが大学では単位も取れないんですよ。喋れることは喋れるんですけど、読み・書きができない。文法とかわからないんですよ。

☆ 宮本委員

この「会話」は、先ほど緒方委員長がおっしゃいましたけれど、何歳から始めるかということで、一般的に語学というのは、第二外国語とか第三外国語というのは、母国語をきちんとしたベースを持って、その上にたったものでなければ、頭の中が混乱して何を言ったかどうかわからない。だから、単語一つ一つ覚えるのは、それからでも十分間に合う。ただし、それまでしておかなければいけないのは、自分が言ったから全責任が自分にあるんだと、必ずしもそうでないよと。もちろん責任はあるけれども、人間間違いをすることもあると。間違ったらそれを正せばいいんだと。みんなと意見がぶつかったら、ぶつかった時にそういう多様な意見で、じゃあどの意見が一番この場で相応しいのかなということであって、できるならば意見の集約をする。集約ができない時には、じゃあこれもこれもこれもあったよね。どういうことからやってみようか。次はこれでうまくいくかな、じゃあ次はこれをやってみようと、そういうふうに臨機応変に変えていくのも大事なんですよ。

日本人は、「ひょっとしたらこれが誰も賛成してくれなかったら困るから」と、そういう場の雰囲気を見て発言する傾向というのは非常に大きいですよ。自分はこう思ってるんだけど、ということも言えない。そういうところを子どもの時からきちんと鍛える。あなたはどうしたいのか。あなたはどう思うのか。お父さんお母さんはこんなふうに思うけどそれはどうなのかなとか、親子の中でもそういうふうにして話し合いをするわけですね。日本では親の言うことを聞かないとか、そういう家庭教育、これはすべて語学教育から始まっている。

今の国語の教科書を見ると、ディベートとかバズ・セッションとかインタビューの仕方は、全部国語の教科書に出てくるんですよ。すごいなと思って。そ

して実際やってみましょうと。国際会議でこんなことがやられてますよと。国際会議で何も一つのことが決まらない。じゃあどれくらいどういう大量の意見が出てきたのか。どれから先にやっていくか、それを実現するためどれくらいの年数がかかるのか。そういうことをしながらするのが会議なんですよ、会合の意義なんですよ、というのが書いてあります。だから、これからはもっともっと変わっていくんじゃないでしょうかね。

★ 教育長

自分の意見をいかに発信するか、発言できるかというのがやっぱり大事ですよ。そういう意味では、いま言われましたようにディベートをもっとやると、討論をやると。自分の意見をいかに相手に納得させるかというような、そういう発言能力ですかね、会話能力を含めてですね、非常に重要だろうと思いますし、それを英語でできるようになれば言うことないんでしょうけど。そういう意味では、子どもたちが英語に親しむ体験をするというようなことで、今年から諫早市でも独自にイングリッシュキャンプというようなことで取り組みましたけど、そういう機会をどんどん作っていくのは本当に大事だろうというふうに思っております。

今年の英語暗唱大会では、先ほど申しましたけれども、県の海外派遣授業に行った子が5人いたそうですが、そのうちの一人が諫早市の子でもでしたが、スイスとかオランダだったですね、行った時の体験というのを発表してもらいましたけれども、やっぱりそういう部分は何といいますか、外国で交流するということは、非常にその子の人生にとっても素晴らしいことだと思いますし、それから発展していけば非常に良いことだと思います。

その子は宇宙飛行士になりたいというようなことで応募したというようなことでした。何かそういうふうな体験をもっともっとしていきたいなという感じは持っています。

☆ 宮本委員

今、諫早市もALTの方がたくさんいらっしゃいますよね。そういう方たちとこの間一緒に話をした中で、「とにかく子どもたちに自分の意見を言わせたい。でも、今の子どもたちは何かないかといったら、手をどんどん、どんどん挙げるようになってきている。これは素晴らしいことだ。それができる子はきっと自分の意見をすぐ言えるから、言いたいことがあれば英語で言おうとするのもっとさらにうまくなるんじゃないか」というふうに言っていましたので、是非そ

ういうことを教育委員会としてALTを利用してとか、それからウエスレヤンの留学生がたくさんおられますから、今やっているキャンプをどんどんやっていただいて、それを今度褒めてあげる。褒めてあげると人間自分がやったという達成感がでてきますから、そうするとまた上の段階に行くということで、色々なそういうことを捉えて、例えば表彰ではないけれども、君の意見はすごかったとか、君は大勢の意見を捉えてまとめて答えて上手だったとか、そういうことを褒めてあげると良いんだと思います。

★ 教育長

もっと生の英語で喋れる機会を増やしてやれば良いと思いますけどね。長崎には外国の船が入ってきたりする機会があって、もっと諫早の子どももそういうところに派遣できればいいかもしれませんけどね。外国に開かれた街の隣ですから、体験ができればなという感じはしますけれども。

● 市長

ところで、アメリカでは英語の勉強はするんですかね。アメリカの国語の勉強をするんですかね。

日本語って非常に難しいじゃないですか。尊敬語があつてみたり、漢字があつてみたり、非常に多岐にわたってますよね。古文もある、古語もある、ということで日本語の勉強は非常に多岐にわたるじゃないですか。アメリカでアメリカ語の勉強はするんですか。

□ 学校教育課長

グラマーとかコンポジションとかリーダーとかそういうふうな分け方はあるんですが、市長がおっしゃるとおり日本みたいに、そういう専門的なものは少ないんじゃないかと。

● 市長

日本語を学ぶことは、要するにアメリカで言う文法とか何とかを学ぶよりも、もっと学び感というかボリュームがあるわけですよ。だから、もちろん英語は喋れるようにならないといけないかもしれませんが、日本の伝統的な、語学って文化ですから、漢字があつてみたりとか、尊敬語があつてみたりとか、古語があつてみたり古文があつてみたりとか、それぞれに意味があることだと思ふんで、そこがないがしろになるような英語教育であつてほしくはないなと

思うんですよ。日本語の時間を削って英語ばかりというようなことでは、やっぱり日本の国力といますか、そういう部分と反するような気がしますから、独特な言い回しがあるじゃないですか。直接言わないとか、だから討論で負けやすいということがあるんでしょうけれども、直接言わなくて間接的に表現することによって自分の意見を伝える、なかなか外国人には分かりにくい伝え方をしますよね。それは相手の立場を思いはかってそういう言い方になるだと思っただけでも、そこはそこでちゃんと教えてもらわないといけないと思いますけど。

☆ 宮本委員

今、市長がおっしゃったのは文化そのものですよ。それで、アメリカでも普通一般の人は深く習わないけれども、ある程度になって立場が出たり、国際的になってきたりすると、そういう言い回し方とか、言葉を変えるとか、私が旅行に行ってから一番ビックリしたところは、例えば一泊二日で旅行をしている、「ワンナイト、トゥーデイズね」と、ナイトを“n i t”と書くんですよ。“n i g h t”じゃないのかと思っていたら、いや“n i t (ナイト)”だと言い張るんです。それで、大学に行って聞いたら、本当はお前が言うことが正しいんだけど、今頃は発音どおりで書いてもみんな通用するんだと。だから心配しなくていいんだと。そういう言葉ってたくさんあるんですね。言い方が口で聞くのと一緒なんだけども、書くと違う。多分、今のALTの先生も、そういうことも平気でこれでいいよと教えてるんですよ。

● 市長

若い人の新語と一緒にできませんね。分からないんですよ。

☆ 宮本委員

言葉は生き物ですからね。ずっと変わってきているわけですからね。

★ 教育長

そうですね、アメリカでも古典英語というものもあるんでしょうからね。そういう部分は昔の英語をするんでしょうね。

☆ 宮本委員

前オバマ大統領がそういう表現が非常に上手かった。でも今度のトランプさ

んはヤンキー堅気で直接的な表現をしますね。

★ 教育長

ありがとうございました。まだ皆さんから英語教育についてご意見いただきたいところなんですけれど、もう一つのテーマにいかせていただきたいと思います。

二つ目のテーマ「子どもの体力」につきまして、皆様からご意見をいただければと思いますが、まず、事務局から説明をお願いします。

□ 学校教育課長

2点目のテーマにあります、「子どもの体力について」ご説明いたします。資料は15ページをお開きください。これは平成28年度に実施いたしました全国体力・運動能力・運動習慣等調査の諫早市の結果を全国平均、県平均と比較してまとめたものでございます。

まず、各種目の全国的な傾向としましては、小学校では男子の上体起こし、反復横跳び、20mシャトルラン、そしてそれから、女子の上体起こし、反復横跳び、20mシャトルラン、50m走が、平成20年度の調査開始以来、最も高い値が出ております。一方、平成21年度以降、男子のソフトボール投げが低下しており、平成20年度の調査以降最も低い値がでております。

中学校では、男子の反復横跳び、20mシャトルラン、女子の上体起こし、反復横跳び、持久走、20mシャトルラン、50m走、立ち幅跳びが平成20年度の調査以降、最も高い値が出ておったということでございます。一方、中学校につきましては、男子の握力、ハンドボール投げが平成20年度の調査以降低下し続けており、最も低い値でございました。先日の新聞におきましても、全国的に投げるとか、握る力の低下がすごく目立つということが全国的に出ております。

諫早市におきましては、ソフトボール投げや、ハンドボール投げは全国と同じような傾向があるようでございます。また、反復横跳び、いわゆる敏捷性、シャトルラン、いわゆる持久力、立ち幅跳び、瞬発力が、昨年度同様課題が見られ、平均が高い種目と低い種目の偏りが見られるのが諫早市の特徴でございます。

また、運動や体育の授業の意識調査で、学年が上がるにつれ運動や体育の授業に対する関心、意欲が低くなっているところが、心配なところでございます。

現在、諫早市内各小・中学校においては、体力向上プランを策定し、年度ご

とに課題を整理し、プランに修正を加えながら実践しているところでございます。

体力の向上には、運動の種目ごとの体力や技術を高める取り組みや指導が必要でございますが、併せて日頃の運動習慣の定着、それから運動やスポーツ、体育の授業に対する意識の向上、そして達成感、それから挑戦、自己肯定感に関する心理的側面の充実が必要でございます。これらの関連を図りながら体力のさらなる向上に努めてまいりたいと考えているところでございます。以上、「子どもの体力について」の説明を終わります。

★ 教育長

ありがとうございました。諫早市の状況について説明をいただいたところでございます。この表を見ますと、小学校の時は全国平均、県平均より下回っている部分が多いんですが、中学校になりますと伸びてきているというような状況でございます。特に、反復横跳びなんかは、全国平均、県平均より小学校時代は下回っていますが、逆に中学校になりますと全国平均より上回るというような部分があります。

そういうふうな状況で、この表からも、小学校より中学校の伸びが非常に大きく見えるところでございますが、子どもの体力というテーマで、皆様方からのご意見を賜りたいと思います。

☆ 宮本委員

いいでしょうか。先ほどの言葉でもそうですけれど、人には成長というのがありますし、成長は一様にはいかなんですね。結局、子どもの時にはどういう能力が良いのか。小学校低学年の時はどういう能力か。一般的に言われるのは、最初に発達していくのは神経系統、それから次にはある程度スピードが出てくる。次には力強さが出てくる、そういう順番がありますけれども、個人差も非常に大きいというのが、中学生、高校生までの人としての特徴だろうと思います。

だから、ここに出てくる数字だけを見ても、あまりよく分らないので、教育長もおっしゃいましたけど、悪かったけれども少し追いついているんじゃないかというのは、結構、早熟児が多いところは早いときには良い点がとれるけれども、先々になってくると変わらないようになってくるということで、次の18ページに細かい数字がいっぱい並びますけれども、これをつぶさに見てみると、平均点と標準偏差というところを見てみると、あんまりこだわる必要もないん

ではなかろうかというふうに思うんです。この丸とか三角、二重丸はですね。そこそこに順調に成長をしていっていると。

私が注目したかったのが、「運動が好きか」というのがアンケート調査の回答でありますけれども、小学生では、好きだと答えたのが平均でいえば89.2パーセントと書いてあります。中学生で82.8パーセント。これを平成28年度で見ると、運動が好きかという一番低い答えが、中学生1年生女子の73.2パーセントということは、逆にいったら実に3割近くが運動好きでないと言える。それを広げてみると、前年は同じ中学1年生女子でも71.9パーセントと、もっと低かったということになってきます。他のもそうですよね。

だから、意外とそういうところを見てみると、運動好きでないとという子が小学校で1割、中学校でいえば平均して2割。この子たちが運動をしなかったら、その時期でないと体に対する成長というのはありえませんが、ここに朝食の摂取も同時にできてきますけれども、諫早市で朝食を食べていないのは1パーセント前後で結構少ない数だというふうに考えます。日本全体では1.6パーセントくらいですから。

そういうことからすると、運動を好きでない子をいかにして運動させるかということに力を置いていただいた方が、将来の市民として体力のある市民、体力があれば仕事も続きますし、勉強を本当にやり始めようと思ったときに、しっかり勉強をやれることに繋がると思いますので、そういうことに目を向けていただければというふうに思います。

★ 教育長

はい、ありがとうございました。他にご意見ございませんでしょうか。
大石委員、どうでしょうか。

☆ 大石委員

そうですね、いま宮本委員が言われたように、数字を元にこういった体力云々というものを相対的に見ることも大事なんだろうけれど、体力について諫早独自で、例えば小学校ではこれを中心にやらせているとか、今後はやっつけようとか、この数字を受けてですよ、そういった計画の具体的なものがあるのかどうか。

★ 教育長

何か具体的に取り組んでいる部分がありますでしょうか。

□ 学校教育課長

毎年このような調査結果が配付されます。そして、県のほうでは県下で一斉に取り組んでいく。特に、この平成28年度は柔軟性ということで、ジャックナイフ・ストレッチというのがあるんですが、それを県下の学校で取り組んでおります。

それから、諫早市におきましては、市全体というよりもそれぞれの学校に運動の課題等がございます。そして、この調査をしますと、その集計で学校の強い面、弱い面がでてきますので、その運動の要素を入れた種目等を各学校で取り組んでおるといのが実態でございます。

☆ 大石委員

結局、全国の数字とか県の数字とか見ても、ただの数字でしかないわけですよ。やっぱり、今後何をやるかのほうが大事で、先ほどジャックナイフ・ストレッチというのを県のほうがやってるということでしたが、諫早に関しても各校でやってるのであれば、それを全部把握して、学校の数字がどう出るのかということも検証をして、逆に、どれが一番効果的なのかということで、諫早で少し絞って推進をする、というようなことのほうが大事なことではないかなと思いますけどね。

★ 教育長

数値的な部分は、毎年少しずつ変わってくるんですよ、学校でも。

体力についていえば、そう全国とは差がないような感じがするものですから、どうでしょう体力という部分でいえば。

☆ 秀島委員

地域性というので差がでるということはないんですかね。

□ 学校教育課長

諫早市内の地域性というので、運動の成績というか、運動能力の点数の違いというのはあんまりなくて、でも土地柄というのはあって、よく運動に親しむとか、ここは陸上どころだとか、ここは野球だとか、そういう土地柄は十分にあるなというのは感じておるところです。

☆ 秀島委員

すごく自分のところの地元が、運動に関してとても熱心だなと特に感じる場面が多いんですよ。社会体育がすごく盛んですし、特に、例えば遠竹小学校は今全校生徒が25名しかいないにもかかわらず、過去も推移的には人数は2桁でずっときているような状態だと思うんですけども、バレーだったり、例えばソフトボールだったり、陸上だったり、それを掛け持ちしながら取り組んでいるところも見えたりするので、そのあたり多少地域性があるのかなと常々感じる場所です。

☆ 大石委員

地域性って指導者ではないですか。そういうところにいくほど、ずっと一人の人が教えてますもんね。

☆ 秀島委員

体力をつけるためには、基本的な生活習慣の定着というのは、とっても大事ではないかなというのがあって、先ほど、宮本委員さんが朝ごはんのことをおっしゃってたんですけど、例えば、夜睡眠をしっかり摂るとか、朝食を欠食せずに摂るとか、内容もバランスのいい食事を摂るとか、そういうところがベースにあってこそ、その上に運動能力とかというもののものってくるものだと思うので、そのあたりは各学校でも色々な形で家庭と連携しながら取り組まれていると思うので、繰り返し、もっと積み重ねていくことで相乗効果になるんじゃないかと思います。

★ 教育長

学校によっては、小学校で朝から全校走りましようということで、始業前にみんなが走るとかですね、そういうふうな取り組みをやっているところは、多分結構あるだろうと思うんですよ。そういう面で、生活習慣というようなことで位置づけられればいいんでしょうけどね。

☆ 秀島委員

体を動かすことの楽しさとか、それが身に付いて分かった上で運動に取り組むということでない、嫌々やらされていて、なかなか向上するものではないと思うので、アンケートの中でも、体育の授業は楽しいとしているパーセンテージと運動が好きというパーセンテージとは、体育の授業はある程度のパーセ

ンテージがいついながら、少しそこに差があったりしますよね。

★ 教育長

諫早は世界的なアスリートが育ってますから、そういう意味では非常に運動に取り組む、生活習慣も含めて、やっぱり地域性はあるんじゃないかなという感じがしますけど。

宮本市長の方から、何かございますか。

● 市長

意外とみんな真面目だなと。真面目に以外とみんなしてるんだなと思いますけれど、もう少し乱れているのかなと思いましたが、意外と真面目ですよ。真面目というのは、例えば、睡眠時間はある一定部分は取れているということ、中学ぐらいになると、そうじゃないんじゃないかなと思いますけど。食事なんかもそうですよね。意外と私が思っているよりも真面目ですよ。

★ 教育長

そうですね、生活はきちんとされてるんじゃないかなと思いますけどね。

☆ 宮本委員

運動はできれば週に400分前後というのが理想的だといわれていますけど、ところが、中学生になると全く運動しないという子が、かなりの数いるということと、もう一つ、ここの中に出てくる23ページ、中学生のゲームをする、「一日のテレビゲームをどれぐらいしますか」で、2時間から3時間、あるいは3時間以上という子が結構いるんですよね。男の子で大雑把に言うと4割前後、女の子でも3割ないし4割ぐらいと。

これは、それだけテレビゲームしてると他の事をする時間がないんじゃないかなろうかというふうに思いますので、こういうデータをもってフォローをしていただいて、生活指導とかに役立てていただければなというふうに思います。

今、テレビが言われているのは、精神、神経をきちっと成長させるためには、1日で30分以下というふうに言われてますよね。色々なデータが出てきてますけど、最大限見積もっても1時間までが限度と。それ以上すると精神的にも何かの障害を受ける危険性がありますよと。だから、そういうことも子どもたちにずっと教えていく必要があるのではなからうかというふうに思います。

でも、小学校の低学年でも高いですよ。22ページを見たら。

★ 教育長

そうですね、低学年から結構見てますね。

☆ 宮本委員

多分、こういうテレビゲーム漬けになったら、中学校になってもずっとやったりするのではないですかね。小さい時からそれを教えてやる。

● 市長

スマホを一日何時間しますか、というアンケートはないんですね。

□ 学校教育課長

このテレビゲームの中に、テレビ、スマホも含まれてると思います。

★ 教育長

今、スマホ、携帯電話の所持率は中学校で3割ぐらいですかね。自分用を持っているというのは、3割は持っている。

☆ 宮本委員

それぐらいですか。

★ 教育長

高校生になると9割です。

☆ 宮本委員

熊本地震の時に、一斉に教室のあちこちで鳴り出して、ワーッとなって大変なことになったということがありましたけれど。

★ 教育長

緒方委員長は何かありますか。

☆ 緒方委員長

先ほどの保育園の話に戻るんですけども、朝からわりとぐったりしている子どもたちがいます。想像するに睡眠不足、栄養不足、愛情不足なんだろうと思います。例えば、入園して9ヶ月たつ3歳児ですが、未だに朝しばらくは泣

き続けているお子さんがいます。

私たちができることというのは、ある程度、保護者に対しての支援ですが限界があります。あまり口やかましいことを言うと保育園が変わられますので、恐る恐るという部分があるんですけど、保育園を出てしまうとそことの関係が途切れてしまうんですけども、どうしてるんだろうなというのがあります。

産科、小児科、健康福祉センターですとか、公民館活動、保・幼・小・中と切れ目のない、分野を分けられないような縦にも横にも連携ができるようなそういう支援というか、そういう施策があることで、睡眠も摂れる、食事も摂れる、親の愛情も十分受ける、そして、その上でやる気というものが伴えば、さっきおっしゃってましたけど嫌々やらされている感じではなくて、積極的に取り組めるような子どもたちが増えることによって、数字は上がっていくでしょうし、また学力も同様に伴っていくんじゃないかなというふうに思いますので、そういう全市、全分野的な取り組みを是非やれていけたらなというふうに思います。

★ 教育長

ベースは家庭であるというようなご意見かなというふうに思います。

まだまだご意見はあるかと思いますが、そろそろ予定の時間を経過してしまいました。ここで、一応締めていきたいかなと思っておりますので、最後に市長から総括的にお願いできたらというふうに思いますが、どうでしょう。

● 市長

今日はひたすら聞き役に回ろうと思ってこの場に参ったんですが、なかなかこういうことを考える時間というのはあまりないので、そういう意味では非常に役立ったかなというふうに思います。

多様な意見がでるということは素晴らしいことではございますが、そういった意味で今後も総合教育会議が、定期的に、しかも、あまり肩を張らないような論議の場になれば良いかなというふうに思っております。

ありがとうございました。

★ 教育長

ありがとうございました。意見交換は以上ここまでというふうにさせていただきます。

最後に議事の2番目になりますが、その他ということではございますが、次回の会議ということではございます。今年度中はどうしても日程的に厳しいと思わ

れます。今年度はこの1回のみとさせていただきたいというふうに思います。

来年度の会議の日程などにつきましては、今後、具体的に決まりましたら、事務局からご連絡をさせていただきということで、ご了承いただきたいというふうに思います。

それでは、本日の会議につきまして、これで閉会とさせていただきます。

大変、ありがとうございました。